

平成26年度岡山県子ども読書活動推進会議第1回会議議事概要

- 1 日 時 平成26年11月17日(月) 13:30～15:30
- 2 場 所 県庁9階第2会議室
- 3 出席委員 相賀委員、大村委員、岡武委員、黒田委員、塚本委員、徳山委員、藤井委員、森本委員、湯澤委員
白神委員欠席(五十音順) 出席9名・欠席1名 計10名

4 概 要

(1) 会長、副会長選任

互選により湯澤委員を会長、藤井委員を副会長に選任した。

(2) 申し合わせ事項確認

原則公開、議事概要を県ホームページ掲載することとした。

(3) 第3次岡山県子ども読書活動推進計画の進捗状況等について

事務局から資料により説明した後、各委員から御意見をいただいた。

(委 員) 評価指標の「推薦図書の設定」とは何か。

(事務局) 学校図書現状調査の結果を載せている。各学校で設定しているお薦め本のことである。

(委 員) おもしろ読書事典の幼児版は作っていないのか。

(事務局) 作成していない。

(委 員) 現在、第3次計画に取り組んでいるところだが、第3次計画の目的に近づいていくことが必要。現場の委員の方から見て、今の子どもたちの現状や課題はどうか。発達段階に応じてという点や、社会情勢も変わってきているという点からも、子どもの姿を共有する必要があるのではないか。

(委 員) 本好き、本嫌いに二極化している。子どもは本来、本や自然が大好きで、感覚的に欲しており、小さい頃からの働きかけが必要である。本嫌いではないが、そういう環境になかったり、生活リズムに問題がある。親の時間が無くて読み聞かせができなかったり、忙しく時間に追われる生活の中で、本を読む機会がなくなっている。

(委 員) 寝る前に心穏やかに、親も子どももゆったりした気持ちで読み聞かせをすることが大事。強制されると子どもが読書から離れていく。子どもは、本当は本を欲しているものであり、良い形で子どもに本が届けられるとよい。

(委 員) 本の読み聞かせが万能薬というのは違うのではないかと。読書推進と心の充実は分けて考えるべき。近頃の幼い子どもは、読書をする上でも重要となる実体験が足りないし、できていない。親も二極化しており、本さえ読めばいい子になると思っている人や親が毎日10冊読んでやって疲れてしまっている人もいる。幼児期はこれだけ手をかけているのに、小学生になったとたんに手を離してしまうのも問題だ。

小学生は自分で読む力が身につけていないので、自分で読む練習が必要であり、練習する方法を考えてやる必要がある。本を選ぶ力も無い。中学生は本を読む時間が無いし、部活動で疲れている。活字を読むのには労力を要するため、癒やしを求めてスマホなどしている。文学だけでなく、知識を得るための本の活用や調べ学習など、自分の生活をより豊かにするために、幅広く読書があると教えてやる必要がある。

(委員) 保護者の中にはたくさん読まなければならないと思っている人がいる。小学生になって突然独り立ちさせるのは無理があるということだと思うが、保護者の立場ではどうか。

(委員) 読書が意味しているものはどこまでなのか。大人はネットやタブレットで読むことが多くなっており、ネットやタブレットは、場所もとらないし、安くすむ。調べ学習はウィキペディアで調べているので、本でなくても良いし、本がなくても困らない。本を読むのにはある程度時間もかかる。中学生が部活動や試験など忙しい中でわずかに楽しい時間を見出した時、本は読まない。読書の枠を広げることも必要かと思う。

(委員) ネット上にはいい加減な情報も載っている。本は一応編集者の目を通っているのでネットよりは信頼性がある。特に、判断能力の未熟な小中学生にはメディアリテラシー教育で、正確で多様な情報を伝えることが必要。メディアリテラシーも含めて読書推進なのではないか。自分に必要な情報をいろいろな分野から選択することも読書の力であると思う。

(委員) 本でも間違っているところはあるが。

(事務局) 第3次計画の策定を考える際に、目指す姿として考えており、計画の3ページ、下から6行目の二つ目は以下が該当すると思う。

(委員) メディアリテラシーも読書推進に入れて考えるのか。

(委員) 岡山市の学校司書は、メディアリテラシーも含めて考えている。大人が考えることによって、子どもの読書活動推進の幅が広がるのではないか。子どもの読書をすすめる上で、メディアリテラシーは考えずにはいられないし、いろいろと関わってくるものである。

(委員) 中高生はクリティカルシンキングができると思う。子どもだけでなく大人も含めて考えなければいけないことである。親育ちも人的環境を整えるという意味で必要であり、こういった議論がされたことは意味があることである。

(委員) 読書事典の中学生版のランキングを見ると映画やドラマになったものばかりのように見えるが。

(委員) 実際にアンケートに上がった票をまとめたもので、だからといって、ランキングの1位から順番に本を紹介しているわけではない。それだけ、子どもは情報量が少ないということである。純文学のようなもの

のばかりではなく、癒やしを求めて楽に読める本も含めて読書であり、いろいろなものがあって良いのでは。ただ、子どもには選書の力が無い。

- (委員) 読書事典を編集した委員としてはどのように使ってもらいたいか。
- (委員) 図書館では子育てコーナーにも置いている。保護者や子どもが手に取っている。読み聞かせなどで子どもに関わっている大人の方に使ってもらいたい。
- (委員) 私の知っている幼稚園の先生に、幼稚園で読み聞かせをしている本が小学校版に随分入っているとされた。幼稚園で出会った本を、小学校でもう一度自分で読むようになる。中学生は読書事典を持って帰りたいと言っていると聞いた。文学性の高いものばかりでは中学生の手に取ってもらえない。コミックやノンフィクションも入れ、読書から一步引いている生徒も読んでもらえるように中学生版は編集に工夫をした。読書ボランティアの方からは、すごく活用していると聞いている。もっと、学校でも活用して欲しい。
- (事務局) 読書事典の活用状況調査では、作家コーナー、ビブリオバトル、図書委員のお昼の放送、文化祭などでの利用があった。ネットにも掲載しているが一ヶ月当たり300件程度のアクセスがある。
- (委員) 選び方がとてもおもしろい。小さい頃に科学の芽生えがあり、感覚など直接体験することが大切である。幼児期に科学や生命などいろいろなものに出会っていくと良い。幼児版の作成をお願いしたい。
- (委員) 中学生版は、それぞれ柱があって選書しやすいと思う。現状の確認はできたと思うが、よりよくしていくためにはどうしたらよいか。
- (委員) 中学生はとても忙しい。自校も朝読書はしており、だいたいの中学校で朝読書は行われているが、時間設定するのが精一杯。中学校では本や読書が遠い環境にあるので、いろいろな場面から本に接することができればいい。映画から本に入ったり、読書事典を見て本を読んだりすることで、それが中高生の調べ学習や専門書につながると良い。
- 読書事典は、学校だけではなくいろいろな場所にあるといい。例えば、熱が出たり予防接種で診療所に行ったときに読書事典があると保護者や子どもに手にとってもらえるのではないか。お母さんの本離れの対応にもなる。
- (委員) 読書事典の本が学校図書館にあるのか。
- (委員) そろっていない。昔ながらの古い本ばかりでなかなか新しい本は購入してもらえない。学校司書がいれば、少しはちがう。
- (事務局) ないところが多い。図書館司書がいる学校では購入を進めているところ多い。
- (委員) 図書館の果たす役割は大きいですが、中学生を図書館に呼び込む工夫としてどのようなことをしているのか。
- (委員) 読書推進では、学校図書館の役割は大きいですが県南と県北とでは学校

図書館の環境が全く違い、県南と県北の差が大きい。岡山市は充実しているが、県北の学校には司書がいなくて多い。司書がいれば、それだけ本に触れる機会も多くなる。環境面を考えていく必要があり、学校図書館の活用をいかにやっていくかである。読書のおもしろさ、楽しさの実体験を作っていくことが本に親しむきっかけになる。学年が上がると知識も増えるので楽しさも広がってくる。

(4) 未読率の減少について

事務局から資料により説明した後、各委員から御意見をいただいた。

(委員) 中学校の未読率は全国と比べるとよいとは思いますが、読書する子としない子の二極化にどのように対応していくか。中学校ではどうか

(委員) 中学生は本当に忙しい。朝読書は10分程度毎日行っている学校が多い。部活動の朝練の後で疲れて、落ち着いて集中できていない生徒もいる。基本は自分で読む本を持って来ているが、本を持ってきていない子は学級文庫の本を利用するが、本を探すことで時間を費やしている生徒もいる。

中学生にとって学校図書館は遠い。図書館は、調べ学習での活用が多いが、そこから図書館に興味を持つ子がでてくることもある。もちろん、読書好きの生徒もおり、昼休みに図書館へ行って何冊も借りる生徒もいる。

(委員) 高校生はさらに忙しい。みんなが読まないわけではない。読む子はすごく読んでおり、年間200冊という子もおり、こういう子は結構いる。読む子に対しては何もしない方がいい。彼らの興味関心に任せて自分で読みたい本を見つければ良い。土曜日等に補習授業が増えているため、読まない子は仕方がない面はある。

季節やニーズに合わせた特集に活路を見いだしたい。困って図書館に来る生徒の役に立ちたい。高校生の一番は受験で、面接や小論文に関連した、人前で上がらない本とか人の心に訴える話し方の本とかを紹介できればと思う。

特集をすれば生徒が来るというものではない。教科や担任の先生が生徒へ声かけをしてくれるかどうかである。これでかなり違う。教員がもっと図書館に関心を持つことが不可欠で、教員が図書館の機能を理解し、活用できるようになることが大切。司書の努力と教員の関心が必要である。

(委員) 備前市では、朝読書は中学校では行っている学校の割合が高いが、小学校では低い。統計よりも実際の数字の方が低いと思う。学力向上ということで、朝読書の時間を朝学に振り替えてきている学校もあり、これからそういった学校も増えるであろう。学校現場の先生としては、本も読ませたいし、学力も身につけさせなければいけないし、また、指導内容も膨らんでおり、忙しい中で時間を絞り出すのは難しい。

子どもの読書を考えたとき、学校司書の力は非常に大きい。備前市では各校一人の配置にはなっていないが、持ち回りで各学校を回ってもらっている。学校司書が行くようになって学校図書館が明るくきれいに整理され、子どもが本を手にとって読める環境になっている。図書紹介のPOPもあり、学級文庫の更新も活発になった。学校の教員の協力が大事だと思う。

(委員) 学校の先生から頼まれて、読書ボランティアが本を探しに来た。図書館を頼りにしてくれるのはうれしいが、まず、学校司書に相談したら、より子どもに合った本が提供できるのではないかと思った。学校司書が、子ども・先生・ボランティア・図書館などの間に入ってもらえたら、子どもの読書環境はもっと良くなるのでは。学校の先生も学校司書も忙しそうなので、図書館が何か役に立てたらと思う。

中高生に図書館への興味を持ってもらうために、高校生が作った作品を展示した。普段は、カウンター前を通り過ぎるだけの高校生が足を止めて展示を見てくれた。また、司書の体験をした小学生のおすすめ本と、本の紹介をしたPOPを一緒に展示したら、手に取ってもらえるようになった。ちょっとした工夫が本の利用につながっていると思う。県立図書館が行っているティーンズコーナーの展示は非常に良い。

(委員) 司書の勉強会はあるのか。

(委員) 市では、年3回の協議会を開催している。その時に、ミニ講座などを行い勉強している。他に学校司書だけの勉強会も年に数回ある。

(委員) 学校司書が大事。法改正もあった。学校司書がいる学校といない学校とでは図書館が全然違う。特に子どもが小さいほど、本と子どもをつなぐ大人が必要になる。小学生の読まない子にとっては、学校図書館でも遠い。そういう状況で学級文庫は大切である。地元でもPTAがお金を出して図書を整備し、シリーズものの1巻目だけを学級文庫に置いて、2巻目以降は学校図書館に置いて、図書館へつながるような工夫をしている。小学生の時に1冊の本を読み切った体験があると図書館に帰ってこれるが、そういう経験がないと文字文化には帰ってこれない。小学校までに読む練習が必要である。全員を読書好きにするのは無理。スポーツで言えば学校で全員をオリンピック選手に養成するのではなく最低限25m泳げる子にすることだ。最低限の読む力を身につけることが必要と思う。学校の一斉読書はとても意味があり、推進したい。そのためには学級文庫の充実が大切である。

(委員) 一斉読書では先生も読むことが必要。大人も一緒に読むことで、楽しいということが伝わるし、読書は大切だと言葉で言うよりも、共に読んでいこうという環境を作っていけるとよい。学級文庫をPTAで予算化しているところもあったり、知り合いの先生で子どもに読ませたい本を自分で持ってくる先生もいる。学級文庫からも次々借りてい

く例もでている。ニーズに合わせて、季節プラスその子に合った本の紹介に力を入れているいい例がある。一人一人に合った本を手渡してやると、必ず帰ってくるもので、大人の工夫と信頼関係が大切である。一斉読書の数字はもう少し低いかもしれないが、一斉読書の時間に疲れて休んでいる、宿題している子もいるということで質の向上もいる。朝読書のフレームを用意し、量ではなく質に目を向けていけるような提案ができるとうい。一つは先生の取組である。量より質を高めるにはどうしたらよいか。

- (委員) 中学校ではフレームだけではなく、教師の姿勢も大事である。いろいろと連絡事項も多い中で、大切な10分間の朝読書の時間を保証することが大切である。一日の静かなスタートが切れるとても大事な時間である。学校全体で作ることが必要。
- (委員) 朝読書の10分間は、校長、司書、ボランティア等、それぞれに大切だと思える感性が必要である。そのため、子どもと本の橋渡しをする人の養成、研修が必要だと思う。
- (委員) スマートフォンの注意喚起を通知したときのように、朝10分間必ず読書すると教育庁で通知したらいいのではないか。読書量と学力の相関データをつけたらどうか。
- (委員) 備前市では、家庭教育支援の事業で、保護者に読書と学力の相関関係を示したことがあり、関心を持ってもらえた例はある。
- (委員) 強制的にでもテレビやゲーム・携帯がない状態で読書をするということが必要である。読めない子も周りの読んでいる子たちの姿を見ることに意味があり、親が本を読んでいる姿を見せることも必要である。ビール片手に野球中継を見ながら子どもに「読書しろ」と言っても説得力が無い。親の世代は図書館で本を借りるだけのイメージしかなく、レファレンスの感覚がない。保護者に学校図書館の見学をしてもらったらいいのではないか。大人に学校図書館を知ってもらうことが子どもが図書館を活用するきっかけになるのでは。学校全体で図書館を活用するように図書館を運営・活用する組織があればよい。
- (委員) 図書館を利用する先生はごく一部である。先生はとても忙しいので組織を立ち上げるのは難しい。
- (委員) すぐに何かを行うのは難しいので、まずは、うまくいった地域や学校などの実践事例を検証し、今後私たちが目指すべきモデルとして参考にしていくのがよいのではないか。